

直売所向け花きの栽培技術

ハナモモの栽培

春先の直売所では、モモや桜、ヤナギなどの枝ものも人気があります。特に、3月はじめの「ひな祭り」前には、ハナモモや菜の花が花きコーナーをにぎわせています。モモの切り枝や菜の花は、モモの節句には欠かせない切り花です。

そこで今回は、ハナモモの栽培と「ふかし」と呼ばれる促成方法を紹介します。

品種

枝の伸びがよく、収穫後の枝折などの作業がしやすいことから、室矢口、新矢口などの矢口系が全国的に広く栽培されています。

矢口：濃い桃色八重の大輪種。花芽のつきがいいハナモモの代表的な品種。太矢口、中矢口、細矢口などの系統がある。市場性が高い。

寒白：白色八重咲きで、枝が太く花つきがいいが、需要は少ない。

寒緋：赤桃色で花つきがやや悪い。

栽培

育苗

定植の時期は秋(11月頃)、春(3月頃)です。段畑の場合3.0m間隔、平畑の場合3.0×3.0mの間隔。苗木を地際から50～60cmの高さで切り植え付けます。植え付けから3年目頃までは、倒伏の防止のため支柱をします。

仕立て法(台付け)

植付けから3～4年目以降、収穫できる大きさになったら、収穫の土台となる主枝を枝分かれしたところから30cm程度残し、切り枝を兼ねて切ります(台付け)。その後は1～2年ごとに切り枝していきます。同時に不要な枝もすべて切り、太い枝の切り口には癒合剤を塗布して枯れこみを防止します。

切り枝後は、台部分から徒長枝がたくさん伸び秋までに1～2mになりますが、太い枝になり小枝の発生が少なくなるので、新梢が15cmくらいになったところに先端を摘芯して副梢を出させます。

施肥

施肥は春(2～3月)と梅雨時期(6月)の2回。肥料が遅効きすると、枝先端の花つきが悪くなるので、速効性の肥料(化成肥料8-8-8)を使います。

▷1～3年目

春(2～3月):300～600g/1樹あたり

梅雨時期(6月):150g/1樹あたり

▷4年目以降

春(2～3月):900g/1樹あたり

梅雨時期(6月):150g/1樹あたり

収穫・ふかし

毎年切り枝することもできますが、一年生枝は花つきがよくないので、そのま

ま管理して2年目の冬に二年生枝を収穫します。弱い枝は枝全体に光が当たるように収穫後に取り除きます。

ふかし（枝切り促成）では、出荷日から逆算して収穫します。水揚げ日数、促成日数を合わせると、1月で10～24日前、2月で8～15日前、3月では3～8日前が収穫日となります。

ふかし（促成）方法

切り枝を結束して作業室などの屋内で3～5日間（1月は5～7日、3月では1～3日）冷水で水揚げします。水揚げを長くして出荷調節することも可能ですが、水をこまめに取り替えるか、クリザールの1,000倍液で貯蔵するといひ。

ふかし（促成）は、加温可能なハウス（60～80%遮光）などを利用して、孵化さ5cmくらいの水に浸し、18～20℃（上限25℃）の温度、湿度70～90%、暗黒（葉芽の発生を抑え、開花率を高めるため）の条件下に5～7日間（2月下旬出荷の場合）程度入室させるのが理想です。なお暗黒下では、花色が薄くなるので、つぼみに色がつき始めたら徐々に弱い光を与え、花色の発現を促します。枝やつぼみがやや湿っている状態を保つ必要があるので、束にコモや新聞紙をまき枝やつぼみが乾かないようにします。また、つぼみが膨らんで色づいてくるまでは、

1日1～3回霧吹きを行い、色づいてきたら中止します。ふかし中はため水が腐らないよう4～5日おきに交換します。

また、出荷の2～3日前には、寒気などを行って外気に馴らしていきます。

ハウスなどがない場合、温度変化が少なく暖かい室内（15℃程度はほしい）などにやや長く置くことでも促成が可能です。

収穫・出荷

1束の1～3輪ほどが開花しはじめ、数日中には蕾の大部分が開花する状態が出荷の適期となります。



月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
定植年			◎								◎		
2年目			春植え								秋植え		
3年目													
4年目以降													

※ 4年目以降は、枝への花付の良否により1～2年ごとに収穫する。